

# 食と農林漁業からのイノベーション

ーフードバレーとかちで取り組む持続可能なまちづくりー

株式会社クロッシー代表取締役 ● 北村 貴

地域活性化センターでは、地方創生の担い手となる人材の育成を目的としたワークショップ「地方創生実践塾」を実施している。8月26日(水)～28日(金)に北海道帯広市で開催された今年度第3回実践塾の内容について、主任講師の北村貴氏にご報告いただいた。(地域支援課)

## 食の王国、十勝で開催

食の王国北海道・十勝は、日本の耕作地の約5%である26万畝を有し、乳牛・肉牛の飼育頭数は43万頭と全国の10%を占める。

また特産品のじゃがいも、小麦、豆、とうもろこし、長芋などは、そのいずれもが全国トップクラスの生産量を誇り、地域の食料自給率は1100%、年間約400万人分の食料をまかなうことができる一大生産基地である。

そんな十勝で、帯広市を中心に1市16町2村が一体となって「フードバレーとかち」を掲げ、「食」をベースにした地域創造をスタートしたのが2010年。様々な食の施策に

「フードバレーとかち」の冠をつけ、

地域が一丸となって連携・PRをする戦略に至ったのは、危機感が薄く足元の魅力になかなか気づけなかった地域に、外部の視点が持ち込まれたことが大きい。

実は、「フードバレーとかち」は2010年、Uターンして帯広市長に当選した米澤氏が選挙公約で掲げた旗印であり、当選後は同市長の呼び掛けにより、各市町村長が決断し、共に手を携えた成果である。「地域が一丸となって、外に打って出て行くこう!」「外貨を獲得し、地域を豊かに持続させていこう!」という機運が高まる十勝は、今まさに変化の時期を迎えている。

フードバレーとかちは3つの方

針、すなわち、基幹となる「農業を成長産業にする」、付加価値を高める「食の価値を創出する」、需要を創出する「十勝の魅力を売り込む」を掲げ、農林漁業団体、商工業団体、大学・研究機関、金融機関、行政が参加したプラットフォーム「フードバレー推進協議会」を設置。プレイヤールの創出と支援、マッチングを行う。最終的にはその名の通り、食の産業や関連産業、研究機関や人などが集積する場所を目指す。今回は特に先進的な事例をピックアップし、紹介すると同時にフィールドワークを通じた体験をしていただく3日間となった。

## 講義・フィールドワーク(1日目)：コミュニケーションのキー「フード「屋台」の調査研究

実践塾の初日では、フードバレーとかちを推進する帯広市役所産業連携室より「フードバレーとかちの取り組み」について、十勝の産業構造、地域資源と強み、課題とその解決にむけた取り組み、フードバレーとかちの概要とこれまでの実績・成果、についての報告が行われた。

次に十勝発で全国に広がりを見せていった「北の屋台」の事例を紹介。1996年、「街づくり・人づくり」を行うことを目的に研究会がスタート。地域特性の高い街づくりを行うためには求心力となる中心市街地が

重要である。その中心市街地に人を戻すためには何が必要か、という議論を重ねた結果、「人のコミュニケーションが行き当たった。更にそれを解決するキーワードとして「屋台」が見いだされ、ここから本格的に屋台の調査と研究が始まる。北海道の中でも特に寒い十勝で屋台という業態が成立するのか?食品衛生法上の課題をどうクリアするのか?たくさんの課題が立ちあがる中、北の屋台が2001年にスタート。3・3坪という狭い屋台の中で肩を寄せ合い、近距離で飲食をしながら聞こえてくる隣の人の会話を楽しむ。まさにそんなコミュニケーションづくり、人のぬくもりが感じられる場づくりが「北の屋台」の成功の源であるといえよう。162坪の敷地内に20軒の屋台がひしめきあい、開業から10年以上たった今、2014年度の来場者数は約12万人、売上高は約3億円を誇るまでになった。この北の屋台の成功が、全国に屋台村というコミュニケーションを波及させていった。

講義後はフィールドワークで、鹿追町環境保全センターのバイオガスパラントを視察。先に記載した通り、十勝には43万頭の乳牛・肉牛が飼育されている。家畜ふん尿はこれまで堆肥などに利用されてきたが、それ以外の余剰分の扱いが課題であった。しかし、この国内最大規



「北の屋台」についての講義の様子



十勝の農場でのフィールドワーク



グループワークの様子

**講演・フィールドワーク（2日目）…「土壌」をテーマに持続可能な農業についての考察**

模の資源循環型バイオガスプラントでは、家畜ふん尿を再生可能エネルギーとして活用。1日の発電量は約4500kwh/日と、一般家庭450戸分の電気使用量に相当する。ここで生み出されたエネルギーを使って液肥製造を行い余剰エネルギーは売電。またマンゴー栽培、チョウザメ飼育などの付加価値が高い商品開発も行われている。

2日目は、講演として、自然栽培で大規模営農を行う折笠農場の折笠健氏と、100畝を最先端技術で営農する尾藤農場の尾藤光一氏が、「土壌」をテーマに持続可能な農業についてのそれぞれの考察を述べられた。自然な環境の中で育つ作物の品種選抜と、土壌循環を促す視点に立

ち「まだ日本の自然栽培はスタート地点に立ったばかり」と話す折笠氏と、科学的な土壌分析に基づき必要量の栄養素（化学肥料）を土に与える「SRU」という土づくりの組織の代表を務める尾藤氏。二人は対局にあるように見えるが、いずれも「持続可能な農業への挑戦」という視点では一致しており、会場からも多くの質問が寄せられた。

次に十勝の食の豊かさとは本質を追求し続ける食肉料理人集団「ELEZO」の佐々木章太氏から、200店舗を超える会員レストランを有し、川上から川下まで（畜産事業、精肉事業、食肉加工事業、レストラン・販売事業）を営むビジネス構造と、未来型の食産業について話していただいた。

美美子氏の案内で、実際に畑を歩きながら作物について学び、畑の中で採れたての野菜を食べ、土の上に見えることを五感で感じとった。

「いただきますカンパニー」の井田

も当たり前前にある地域の資源をどう活用し、どう価値を見出すのか、という何気ない視点に、価値を作る人がマッチした好事例である。

**グループワーク（3日目）…意見交換、地域でどう生かすか**

3日目はこれらの講義・視察を通じて得た気付きを、自身の地域に持ち帰ってどう生かすか？というテーマでグループワークが行われ、相互の意見交換、発表が行われて全日程を終えた。

**第3回地方創生実践塾（北海道帯広市）の概要**

**第1日目 8月26日（水）**

- 講義①「総論」  
主任講師 株式会社グロッシー代表取締役 北村 貴氏
- 講義②「フードバレーとちかについて」  
講師 帯広市産業連携室 藤芳 雅人氏
- 講義③「北の屋台の取り組み」  
講師 北の起業広場協同組合事務局長 松下 博典氏
- フィールドワーク①「バイオマスの活用と水素社会」  
鹿追町環境保全センター

**第2日目 8月27日（木）**

- 講義④持続可能な農業の展開  
講師 株式会社 折笠農場取締役 折笠 健氏  
有限会社 尾藤農場代表取締役 尾藤 光一氏
- 講義⑤「食肉料理人集団 ELEZO の挑戦」  
講師 株式会社 ELEZO 社代表取締役 佐々木 章太氏
- フィールドワーク②「畑のチカラを体験」（昼食含む）  
おいで農場（幕別町）  
株式会社いただきますカンパニー代表取締役 井田 美美子氏
- 講義⑥「都市と農村の交流・農村力」  
講師 株式会社ノースプロダクション代表取締役 近江 正隆氏
- グループワーク 北村 貴氏

**第3日目 8月28日（金）**

- グループワーク・講評・総括 北村 貴氏